

「江戸青山善光寺奥御用所日記」から見た一八四七年善光寺地震

矢田俊文（新潟大学災害・復興科学研究所）

原 直史（新潟大学人文学部）

一 江戸青山善光寺の善光寺地震史料

本稿の目的は、善光寺大本願所蔵の「江戸青山善光寺奥御用所日記」から明らかとなる弘化四年（一八四七）三月二十四日善光寺地震の様相をみることにある。

「江戸青山善光寺奥御用所日記」は、大本願歴代住職にあたる上人の身の周辺の日常の記録で、本記録はそのうちの青山善光寺第九世誓円上人の記録である。

従来知られている江戸青山善光寺と善光寺地震にかかる史料は「有所不為齋雑録」²に収載された江戸青山善光寺にもたらされた被害報告のみである。「有所不為齋雑録」は添川廉齋が幕末に編纂した史料集で、国立公文書館内閣文庫に写本があり、一九四一年発行『増訂大日本地震史料 第三卷』³と一九四二年発行『有所不為齋雑録』⁴に活字掲載されている。ここでは内閣文庫本の「有所不為齋雑録」から該当の被害報告を掲載する。

（史料1）

信州善光寺ヨリ江戸青山善光寺へ文通之写

急以飛脚致啓達候、廿四日夜四ツ時大地震ニ而宿内出火イタシ一時ニ連火イ
タシ

御霊屋・向御殿・御宝蔵惣而震潰シ、何ニテモ無残焼失仕候、乍去御本堂・
山内経蔵ハ相残り申候、御寺領不残潰レ、町家・旅人共死人数難計、御家来
之内蓮心寺順道・須田昌作并孫兩人・西川夫婦・市弥即死、私方ニ而モ子共
并家来死去仕候、私儀ハ漸命助リ候而已ニテ立之儘ニ御座候、御殿向震潰シ
申候、火廻り候間、御什物・御宝蔵ハ不申及、諸書物・諸帳面類持出シ候間
モ無之、悉焼失仕候、乍去御霊屋御安置

御尊牌者辛シテ持出シ無恙御守護申上候ニ付、御安心可被下候、今以鎮火不
仕一同愁傷計ニ御座候、未死亡人数等其外騒動之儀、慥成事相分り不申、委
細ハ飛脚ヨリ御聞取可被下候、以上

三月廿七日

蟻川義太夫

山形又兵衛

島 領助殿

吉田兵左衛門殿

追而右之段、即日ニモ可申上筈之儀、何分ニモ大変ニ而万事行届兼、手後

レニ相成候、此段御高免可被下候、追而取調可申上候、以上

(史料2)

(四月二日)

一、信州飛脚着、山極亦兵衛、蟻河喜兵衛太夫御用状参ル

一、三月廿四日夜四ツ時信州大地震

御霊屋ゆりつぶし御焼失、御尊牌ハ残らず持出候よし、御殿・御宝蔵不
残御焼失、名号堂も焼失、御家来須田昌作家内共、西河彦一家内とも死
去、其外数多けう死、中く数しれ不申よしなから、いまた相わかり不
申候と申越ス

右の史料1は信州善光寺大本願から江戸青山善光寺⁵⁾に送られた被害報告の写しである。史料1によると、三月二十四日夜四ツ時に大地震が起こり、宿内で火事が起こり、延焼した。霊屋・向御殿・宝蔵は震い潰れ、すべて焼失した。しかし、本堂と山内の経蔵は残った。寺領の家屋は残らず潰れ、多くの町家・旅人が死亡した。家来のうち蓮心寺順道・須田昌作と孫二人・西川夫婦・市弥は即死した。私方でも子どもと家来が死亡した。私は命が助かった。御殿向は震い潰れ、火が回ったので、什物・宝蔵だけではなく、諸書物・諸帳面類は持ち出すこともできず、すべて焼失してしまった。しかし霊屋安置の尊牌は持ち出すことができたので御安心いただきたい。今もつて鎮火に至っていないので、死亡人数などはわからない。詳しくは飛脚のものに聞いてほしい、とある。二十四日に起こった地震の被害の報告は二十七日に行われた。

史料1により善光寺大本願の家来とその家族は建物の下敷きになり死亡し、御殿と宝蔵は震い潰れて火が回って焼失したことがわかり、いまだ鎮火していないこともわかる。

二 「江戸青山善光寺奥御用所日記」から見た善光寺地震

一では、善光寺大本願から青山善光寺に宛てられた文書から地震被害の状況を見た。次に、「江戸青山善光寺奥御用所日記」から善光寺地震による被害記事を検討する。なお、本稿末尾に「江戸青山善光寺奥御用所日記」の善光寺地震に関する記事を掲出した。

まず被害報告の時期について、史料1と史料2の関係から見ていこう。

史料1の発給日は三月二十七日で、発給者は山形又兵衛と蟻川義太夫であった。史料2の四月二日条には、「信州飛脚着、山極亦兵衛、蟻河喜兵衛太夫御用状参ル」とあることから、三月二十七日に発給された書状は四月二日に江戸善光寺に到着したことがわかる。山極亦兵衛は別の史料から善光寺大本願寺役人であることが確認できる⁶⁾。史料1の山形は写本の間違いであろうか。

史料2には、山極亦兵衛、蟻河喜兵衛太からの御用状の内容は、霊屋が揺り潰れて焼失したものの尊牌は残らず持ち出した。御殿・宝蔵は残らず焼失し、名号堂も焼失した。家来の須田昌作と家内、西河彦一と家内はともに死去した、とある。この内容は史料1の被害報告と同じであり、史料2にある信州からの飛脚によってもたらされた「御用状」は史料1にある善光寺大本願からの被害報告に間違いなからう。善光寺大本願の寺役人からの被害報告を記した「御用状」は三月二十七日信州を發し、四月二日に江戸青山善光寺にもたらされた。

さて、「江戸青山善光寺奥御用所日記」には大本願の役人よりも早く江戸青山善光寺に被害報告をもたらした者がいた。七瀬村⁷⁾の曾兵衛である。

(史料3)

(三月二十八日)

一、信州七々瀬村曾兵衛申上候

信州大地震にて当御方もゆりこわれ、残らず御焼失

御堂・山門ハ先御別条無、其外所々もつぶれ、焼失いたし候よし申上候

七瀬村曾兵衛の被害報告は三月二十八日条に記される。地震発災後直ちに報告されたものと思われるが、「申上候」とあることから、曾兵衛本人が江戸に上って青山善光寺へ伝えたものと考えられる。七瀬村は善光寺領で、地震当時善光寺から炊き出しが命じられたことから、比較的被害が薄かった地域と思われる。

(史料4)

(四月朔日)

一、両御丸へ当日の御祝儀御文出ス、両御使番へも出ス

御本丸御使番へ信州の事いまたしかはわかり兼候へとも、余り風聞致

し候ニ付御内々申上候

(中略)

一、信州大地震にて御焼失、いまた飛脚着いたし不申、実セ(説)つわかり兼ニ付、

鳴領助今日出立致、御菓子被下候

一、心光院る信州大地震にて御焼失被遊候ニ付、御見舞として御使僧参ル

一、佐々本源藏、信州へ立帰りに参り度よし願、領助同道にて出立、百足被下候

江戸青山善光寺では、史料4にみるように善光寺の地震被害について三月下旬から多くのうわさが巷にあるものの、信州善光寺大本願からの正式な報告がなく、心配して見舞をよこす將軍家や御三家をはじめとした大名家の奥向、諸寺院らへの報告もままならず、状況を把握するため島領助を四月一日に信州へ派遣している。

次に注目したいのはこの善光寺地震直後に起こった越後高田地震の被害記事である。

(史料5)

(五月二日)

一、越後高田瑞泉寺

伊さ君様(地震)御書御奉文参ル、三月廿四日夜、信州同様大地震、同廿九日又大ちしん(雷)、風雨(雷)らいもよ程強御さ候よし、御堂ハかなりニ御残り、御住居、御藏ハつふれ候よし、御(怪我)けかは無との事申参り候

越後高田での三月二十九日の地震についてはすでに知られていて、松浦律子氏は、善光寺地震に誘発されて起った高田平野東縁断層の一部が震源域と思われるマグニチュード6・5程度の地震であったとする⁸⁾。

史料5には、越後高田瑞泉寺から地震被害の書状がもたらされた、とある。三月二十四日は信州と同様に、越後高田でも大地震があった。その後、高田では二十九日にもまた大地震が起り、御堂はかなり残ったものの住居・蔵は潰れたという。この記事は越後高田城下の瑞泉寺の具体的被害を示す史料として重要である。

本稿では、「江戸青山善光寺奥御用所日記」によって、信州善光寺大本願の

被害を明らかにした。また、同年三月二十九日の地震による越後高田瑞泉寺の被害状況を明らかにした。「江戸青山善光寺奥御用所日記」には、島田などの大奥の女性や、宮家出身の誓円上人の縁戚をはじめとした、多くの人々への地震被害報告や地震見舞の記事が記される。被害報告や地震見舞は日頃の江戸青山善光寺との付き合いのある人との関係がわかり、江戸青山善光寺の日常を探ることもできる。この点については、今後の課題としたい。

註

- (1) 鷹司誓玉「信州大本願江戸青山善光寺智昭上人の生涯」『仏教大学研究紀要』通巻六二号、一九七八年
- (2) 木部誠二著『添川廉斎―有所不為斎雑録の研究―』無窮会、二〇〇五年を参照されたい。
- (3) 文部省震災予防評議会編『増訂 大日本地震史料 第三巻』鳴鳳社、一九四一年
- (4) 『有所不為斎雑録』中野同子、一九四二年
- (5) 「江戸名所図会 卷之三」の南命山善光寺の項には、「同所百人町右側にあり、信州善光寺本願上人の宿院にて浄土宗尼寺なり」とある。牛山佳幸氏によると、江戸谷中にあった善光寺は元禄十六年（一七〇三）に類焼したため青山の地（現東京都港区北青山）に移りいまに至っている。住職の尼上人は原則として江戸青山に居住にしていた。（牛山佳幸『善光寺の歴史と信仰』法蔵館、二〇一六年。信州善光寺大本願兼青山善光寺第七世智観上人・信州善光寺大本願兼青山善光寺第八世智昭上人の伝記については鷹司誓玉氏の業績がある（鷹司誓玉編著『信州大本願江戸青山善光寺智観上人』大本願教化部、一九七六年、鷹司誓玉前掲『信州大本願江戸青山善光寺智昭上人の生涯』）。
- (6) 鬼頭康之「第2章被害と救済、そして復興へ 第一節善光寺領」『1847善光寺地震報告書』中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会、二〇〇七年
- (7) 鬼頭康之前掲「第2章被害と救済、そして復興へ 第一節善光寺領」
- (8) 松浦律子「1847善光寺地震（弘化4年3月24日）災害の概要」北原系子ほか

〔表紙〕
「弘化四丁未年

御日記

奥御用所

(三月二十八日)

一、信州七々瀬村曾兵衛¹方申上候

信州大地震にて当御方もゆりこわれ、残らず御焼失

御堂・山門ハ先御別条無、其外所々もつぶれ、焼失いたし候よし申上候

(四月朔日)

一、両御丸²へ当日の御祝儀御文出ス、両御使番³へも出ス

御本丸御使番へ信州の事いまたし^(未)かとはわかり兼候へとも、余り風聞致し候ニ付御内々申上候

(中略)

一、信州大地震にて御焼失、いまた飛脚着いたし不申、実セ^(説)つわかり兼ニ付、

嶋領助⁴今日出立致、御菓子被下候

一、心光院⁵信州大地震にて御焼失被遊候ニ付、御見舞として御使僧参ル

一、佐々本源蔵、信州へ立帰りに参り度よし願、領助同道にて出立、百足被下

候

(四月二日)

一、信州飛脚着、山極亦兵衛、蟻河喜兵衛⁶方御用状参ル

一、三月廿四日夜四ツ時信州大地震

御霊屋ゆりつぶし御焼失、御尊牌ハ残らず持出候よし、御殿・御宝蔵不

残御焼失、名号堂も焼失、御家来須田昌作家内共、西河彦一家内とも死

去、其外数多けう死⁷、中く数しれ不申よしなから、いまた相わかり不申候と申越ス

(中略)

一、真田信濃守様⁸御使参り、此度信州の事ニ付御見舞参り、

当年御国本に被為入候や、此御ちに被為入候や、御聞被遊たく申参ル

一、真田信の守様へ御見舞仰進給候

一、清水御殿⁹八重園様方御文にて信州の事聞セ給、御見舞として御重之内式重

進給候

(中略)

一、御本丸おまと・おこなへ信州之御焼失実セつに御座候事申出ス、嶋田様¹⁰御

初へも申上候かたよろしく御座候や、御とい合申候^(問)、右御返事ニ御出し被

成候かたよろしくと申参ル

一、今日吉田兵左衛門¹¹御奉行所へ御届ケに出ス

(四月三日)

一、御本丸嶋田様御初へ信州の事申上候、おまと・おこなへも御文出し候

一、壱ツ橋室町様¹²へ昨日之御礼文、外に信州の事御文壱通出ス

一、昨日御届ケおく済かね候^三付、今日も吉田出ル

(中略)

一、堀内新太郎方信州御焼失ニ付御見舞上候

(四月四日)

一、西御丸表使様かたへ、信州御焼失の事申上、御使番へも出ス

一、紀州御殿¹³両御年寄へ信州の事申上候

一、高しま文鳳¹⁴方信州の事聞及び、御機嫌伺文参ル

(中略)

一、おきち参り、此セつ之御見舞百疋上候

一、今日之信州焼亡横死之為七日之間御別時御座候

(四月五日)

一、清水御殿八重園様御部やへ梵定信州の事二付御願御座候て上ル

恭真院様へわらひ・竹の子進給候、八重園様へ空豆・竹の子出ル

(中略)

一、清行院様之信州御見舞として御使参ル

(四月七日)

一、紀州御簾中様之信州之御見舞として御重之内進給候

(中略)

一、此度信州御焼失二付

清水様之御拝借御願遊百両おきち持参いたス

一、目黒長泉院和上様御入来、此節之御見舞御申上あそハし候

(中略)

一、信州飛脚着、御用状参ル

(四月八日)

一、秋月筑前守様之御使者にて、信州大地震御焼失の御見まひ仰進給候

(中略)

一、芝安立院様之先達三崎へ被為入候節小御人形送らせ給候所、右御礼旁信州

之事御見舞として小倉野しるこ御上被成候

(四月十日)

一、今日信州焼亡横死御セカき是有候

(中略)

一、おきち参り、清水御火の番波の戸之信州御見舞五十疋上候

(四月十一日)

一、紀州御殿両御年寄之此節之御見舞としてもち菓子式重、浦セ様・村田様之同御見舞御品代り三百疋参り候

(中略)

一、至善院様之此セつ之御見まひ氷豆ふ・ひぢき・大こん参ル

(四月十三日)

一、信州大勸進家来上田丹下上野へ御届ケニ出候に付

こなたへも御機嫌伺として参り、御逢あそハし、表にて御膳出ス

(四月十五日)

一、河手小太郎参り、御すもし式重、此節之御見舞に百疋上給候

(中略)

一、御門前家持中之此節之御伺として金五両上候

一、清水御殿八重園殿之、信州の事二付

公边之御拝領物にては御座候や御聞被成たくよし申参ル、右御返事に御

拝領物ハ御座候や、いまた相わかり不申と申上候

(四月十七日)

一、此程参り候上田丹下へ御挨拶ニ吉田兵左衛門御使者に参り

御菓子一折被下候

一、嶋領助、今日八ツ半時分信州之歸りろしぜう上候

一、吉尾之御見舞として御すもし壺箱上候

(四月十八日)

一、松平近江守様幾セ・佐山之文にて信州の事二付御見舞御蒸くわし壺重、な

ら漬一重参ル、幾セ・とセ・すみ有へい巻せんへい上ケ候

一、大森講中ひて之御見舞たんこ上候

(四月十九日)

一、小河や吉右衛門此節之伺三色(羊羹)よくわん壺はこ上候

(四月二十日)

一、大坂和光寺36ろ

京都森御殿37ろ之御文届ケ参ル、和光寺より信州大地震之伺百疋上候、

森御殿ろ之御文ハ信州の事ニ付御文御見舞仰進給候

一、高しま文鳳参り、御見舞梅の雪小壺箱上給候、御本御(櫛)けい古申上候

(四月二十一日)

一、鈴木清衛門、信州の事ニ付、立帰りに参り度よし願参り、今日出立、百疋

被下候

一、信州飛脚明日出立いたス

一、大勧進かたへ此度之御見舞に有平卷せんへい壺箱出ス

(四月二十二日)

一、御本丸おまと・おこなへ御文

右ハ信州

御霊や并御道具御焼失の書付上候

(中略)

一、伏見宮様38河村様ろ信州御見舞文参ル

(四月二十三日)

一、見昌院様39ろ御使参り、信州御見舞おせん式重参ル

(中略)

一、南部坂40ろ信州御見舞うき舟壺はこ参ル

(中略)

一、森御殿へ御返事信州の事御書御奉文并ニ表向坊官中へも申出ル

一、伏見宮様へ信州の事御書并ニ御奉文此程之御返事出ル

(四月二十四日)

一、千駄谷佐橋信珠院様41此節之御見舞旁御出被成、御初尾銀壺包、篤竹院様御茶湯料五百疋御上ケ

(四月二十五日)

一、清水恭真院様ろ信州地震に付御尋として

金拾五両進給、八重園様ろ三両、早河様ろ五百疋、糸しま様ろ式百疋、

おせゆ様より三百疋、おゆみ様ろ五百疋、御年寄之御文ニて参ル

(四月二十六日)

一、森御殿坊官中ろ信州大地震御尋として御文参ル

(五月二日)

一、越後高田瑞泉寺42

伊さ君様43ろ御書御奉文参ル、三月廿四日夜、信州同様大地震、同廿九日

又大ちしん(地震)、風雨(雷)らいもよ程強御さ候よし、御堂ハかなりニ御残り、御

住居、御蔵ハつふれ候よし、御(怪我)けかは無との事申参り候

(五月三日)

一、清水御殿御中年寄御三人ろ三百疋、表使御右筆まで御六人ろ五百疋、御中

老御四人ろ式百疋、御右筆御四人ろ式百疋、右ハ此度信州御尋として参り候

(五月七日)

一、紀州御殿

頭龍院様御一周忌ニ付、や(野菜)さい壺台御備へ、大納言様へ(枇杷)ひわ(籠)かこ進

給、御文(添)そへ出ス、浦瀬様・村多様へぢしん御見舞御挨拶やさい出ル

(五月十一日)

一、大久保聴山様46ろ信州御見舞干菓子一折参ル

(五月十三日)

一、奥平瀧七様御文にて

芳蓮院様⁴⁷を折ふし御尋旁信州之御尋も仰被進、御重之内御^(煮)にしめ・御蒸くわし進給候

(中略)

一、おらん田やは、参り、信州御見舞上候

(中略)

一、京都東六条⁴⁸を信州之御見舞御奉文参ル、瀧沢事大隅と改名被致候よし申参ル、右御文舛やと着

(五月十五日)

一、戸山慈眼院様⁴⁹を信州御見舞御すもし式重参ル

(中略)

一、越後伊さ君様へ御返書出ル

一、信州飛きやく出立^(脚)

一、信州大地震二付、大勸進御かたを信州こなたへ

御見まひとして米五ひやう^(俵)、御酒壺樽参り候よし、右御挨拶として御文こ

之内御反物出ル、南照院、法誠院⁵⁰、丹下初⁵¹へ御見舞御茶壺はこつ、被下候

一、松代吉沢初五人へも右同断

(五月二十二日)

一、麴町講中⁵²を信州焼亡御施我鬼願今日御勤御座候

(五月二十四日)

一、香樹院帰りますもし上候、養玉院⁵³を信州御見舞として御目ろく^(録)御くわし上給候

(六月二日)

一、京森御殿方之御返事^{和光寺}を着、和光寺より隠居和尚当二月十三日一周忌

二付御回向料百疋、兩人并領助へ銀壺両目ツ、御次へ五十疋、本堂之人へ五疋目、御侍中へ三疋、信州山極はしめ三人へ式疋ツ、参ル、信州之儀二付御機嫌伺式百疋、兩人領助へ五十疋ツ、御次へ百疋、信州山極へ銀壺両目、侍中へハ壺両目参ル

(六月十四日)

一、越後高田伊さ君様を御書并二御菓子進給候

(中略)

一、村雲様⁵⁴を信州御見舞として道明寺式袋進給候

(六月十五日)

一、信州飛脚着致ス

(六月十九日)

一、おさち参りうとん上候、清水おさほ・袖路を信州之伺として式百疋上候^(鯺鮓)

一、信州飛きやく出立^(団扇)

一、越後伊さ君様へ此程之御返書并こなたを暑中御書御うちわ御半切進給、藤崎へうちわ被下

(六月二十八日)

一、御本丸おこな参り、御本堂⁵⁵御かわら・御畳集り分御持参、おこなを御菓子

壺折・御うちわ・御初尾御上被成、おまと・おこなを御ろうそく御上被成

候、白たまうき之御酒御膳出ス、右集り

金高六拾兩分御納メ被成候、外に芝岳蓮社⁵⁶より之御利分も御持参 式

兩壺分ト壺五五分

(七月五日)

一、今日信州焼亡横死百ヶ日二付、御せかき御座候

一、今日信州焼亡横死百ヶ日二付、御せかき御座候

(七月二十七日)

一、御本丸嶋田様御初御蓮名にて、先達之御合力御願二付

公方様御始御附中₅₇之御寄進、御使番頭持参にて明日か明後日か両日之内幾日にもよろしく候や、尚又右之御品半金御渡しにいたし候や、不残御渡し被下候や、御問合御文参り候

御返事に明日不残御納メ遊戴度御事申上候

一、御本丸おまと・おこな之文にて、明日おまと事参り候との事申参ル

(七月二十八日)

一、御本丸おまと参り、御初尾さらし_(晒)壹反御上被成候、おまと・おこな_(美濃)奉書

三状・みの紙五状・御ろうそく・白砂糖・うとん粉壹箱御上被成候、昨日

御文にて申参り候

式百両

御持参被成候、御膳御酒ひや麦出ス、帰り之セつ御さしん之すいきつち人形、おまと・おこなへ外に同人形被下候

(七月晦日)

一、清水八重園様へ御寄進御吹聴申上、おさつ出ス

(八月六日)

一、真田様へ信州の御挨拶として御茶壹はこ進給候

(八月十五日)

一、清水おさよへ先達之御寄進金請取御供物外にはな紙・風呂敷_(数珠)・じゆず被下候

(中略)

一、おみせ参り玉くす白酒上給候、御寄進持参、酒

(八月十八日)

一、麴町藤山参り御寄進并にそは_(蕎麦)壹重上候

(九月六日)

一、内藤充真院様₅₉萬千の参り御寄進持参

充真院様_(柿)かき壹台まめかいもち壹箱進給候

(九月十六日)

一、信州飛脚着

(十月九日)

一、御本丸おまと・おこなへ 御本堂先_(飯)かりに

御本尊様御移し₆₀に相成り候事申出ス

(十月十日)

一、御本丸嶋田様御初へかり御引移り之御札文出ス、おまと・おこな御初へ右

御札文赤飯四重よろしく御取計ひ御頼申出ス

一、御本丸おまと・おこな_(薄緑)御内々にて古うす_(障子)御上被成、右之内おこゐ・

お喜た₆₁も御内々御上被成候二付、赤飯壹重上ル

(十月十一日)

一、御本丸おこな・妻木

新御堂へ御引移り二付御参り、嶋田様御初₆₂御重之内壹組、おしち様₆₃

御ろうそく、おこな・妻木₆₄御初尾百疋ツ、御細工物壹台・御菓子・

御紙御上被成候、おまと・おこな_(障子)御内々新御堂之御せ_(障子)うじ紙としてみ

の紙十状、おまと₆₅御内々御玄猪御上被成、おまと・おこな・つま木₆₆

御ろうそく御上被成、おしる₆₇御酒御膳出ス

(十月十二日)

一、登州奥智法院参り御わた₆₈壹包御寄進、百足やよし_(進)御寄しん

(十月十八日)

一、内藤様まぢ野る此程之御礼文、萬千野よりよくわん壱はこ、津山様より御寄進式百疋参ル

(史料註)

- 1 七々瀬村 長野市鶴賀。古くは七瀬川原町と呼ばれ、善光寺領のうち。箱清水村、長野村、七瀬川原村、三輪村の一部に寺領がある。地震当時は善光寺から炊き出しを命じられた(鬼頭康之「第2章被害と救済、そして復興へ 第一節善光寺領」『1847善光寺地震報告書』中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会、二〇〇七年)。
- 2 両御丸 江戸城本丸と西ノ丸。本丸には第十二代將軍徳川家慶、西ノ丸には世子徳川家祥(家定)の大奥が存在した。
- 3 御使番 江戸城大奥や大名家奥向の女中の役職。大奥では広敷向との境の下御錠口の開閉を司る。
- 4 嶋領助 青山善光寺役人か
- 5 心光院 浄土宗、飯倉町(港区麻布)
- 6 山極亦兵衛、 蟻河喜兵衛太 二人とも善光寺大本願寺役人
- 7 けう死 凶死か
- 8 真田信濃守 松代藩主真田幸貴
- 9 清水御殿 清水徳川家屋敷、後掲註17参照
- 10 嶋田様 大奥女中、徳川家斉・家慶の代は表使。表使は大奥の外交係で、一切の買物、留守居や広敷役人との応接などを取り仕切る。
- 11 吉田兵左衛門 青山善光寺役人か
- 12 老ツ橋 一橋徳川家屋敷。当時の当主徳川慶寿の正室は誓円上人の叔母にあたる。
- 13 紀州御殿 紀伊徳川家屋敷。御年寄は奥女中の役職名で、奥向を統括する。
- 14 高しま文鳳 高島文鳳、江戸後期の女性儒者、能筆家
- 15 別時 別時念仏のこと
- 16 梵定 他箇所の記載から青山善光寺の尼僧と推定される。
- 17 恭真院様 清水家・徳川斉明の正室。一八二七年斉明死去のあと剃髪して恭真院となる。誓円上人の叔母にあたる。
- 18 清行院様 他箇所の記載から、一橋徳川家所縁のいずれかの人物の後室と推定される。
- 19 紀州御簾中様 紀伊徳川家十二代徳川斉疆の正室
- 20 目黒長泉院 浄土宗、目黒区中目黒
- 21 秋月筑前守様 日向高鍋藩前藩主秋月種任
- 22 芝安立院 増上寺境内安国殿(東照宮) 別当
- 23 三崎 谷中三崎町法住寺、浄土宗増上寺末
- 24 小倉野 餡玉のまわりに小豆をまぶした菓子
- 25 せかき 施餓鬼供養のこと
- 26 御火の番 奥女中の役職名
- 27 至善院様 他箇所の記載から、紀伊徳川家のいずれかの人物の後室と推定される。
- 28 上田丹下 善光寺大勧進寺役人
- 29 上野 寛永寺。善光寺大勧進は地震の即日、上野寛永寺へ被害報告の飛脚をさしたてたが、再度拝借のために江戸に上田丹下らを派遣している(鬼頭前掲「第2章被害と救済、そして復興へ 第一節善光寺領」)。
- 30 御すもし おすもじ、鮓の女房言葉
- 31 御門前 「文政町方書上」によれば、青山善光寺門前は家数三八、うち家主二〇、店借一八。
- 32 ろしぜう 路次状か
- 33 松平近江守様 広島新田藩主浅野長訓。上屋敷が青山善光寺と隣接していた。
- 34 有へい巻せんへい せんべいに有平糖を巻きつけた菓子
- 35 大森講中 江戸南郊大森近辺の信徒集団
- 36 大坂和光寺 浄土宗、蓮池山智善院、善光寺大本願の兼帯所。開基の智善上人は

- 善光寺大本願第百十三世上人。堀江あみだ池（現大阪市西区）にあった。同寺については、伊藤純「近世河内・大坂地域における善光寺の布教活動『大阪歴史博物館研究紀要』第一四号（二〇一六年）を参照されたい。
- 37 京都森御殿 聖護院門跡、聖護院の森の中に寺があったため森御殿ともよばれた。当時の聖護院門跡雄仁親王は誓円上人の兄にあたる。
- 38 伏見宮様 誓円上人の生家。当時の当主は二十一代睦宮（後の貞教親王）で、誓円上人の弟にあたる。
- 39 見昌院様 他箇所の記事から、高輪の久留米藩有馬家下屋敷に居住した、いずれかの人物の後室と推定される。
- 40 南部坂 麻布南部坂に所在した交代寄合旗本松平主水の屋敷
- 41 千駄ヶ谷佐橋信珠院様 千駄ヶ谷に屋敷があった旗本佐橋家の後室と推定される。
- 42 越後高田瑞泉寺 上越市、浄土真宗。宝暦六年（一七五六）の「信州南条瑞泉寺由緒書草案」によると、瑞泉寺はもと勝願寺といい、信州にあったが、寛永八年（一六三一）に高田に移り、延宝元年（一六七三）に寺号が瑞泉寺となった『上越市史 別編4 寺社資料二』、上越市、二〇〇三年）。
- 43 伊さ君様 瑞泉寺住職井上宅恵の室、鏞宮（いさのみや）政子女王。伏見宮家出身で誓円上人の叔母にあたる。
- 44 顕龍院様 紀伊徳川家十一代藩主徳川斉順、一八四六年没
- 45 大納言様 紀伊徳川家十二代藩主徳川斉彊
- 46 大久保聴山様 他箇所の記載から、尾張徳川家下屋敷内にあった精林庵の尼僧と推定される。
- 47 芳蓮院様 豊前中津藩主奥平昌暢正室、奥平昌暢は一八三三年没
- 48 京都東六条 東本願寺の連枝屋敷皆山御殿に居住した、東本願寺二〇世達如長男宝如後室真心院。誓円上人の叔母にあたる。
- 49 戸山慈眼院様 尾張徳川家下屋敷に居住するいずれかの人物の後室と推定される。
- 50 南照院、法誠院 善光寺大勧進衆徒か
- 51 丹下 上田丹下のこと
- 52 麴町講中 江戸麴町近辺の信徒集団
- 53 香樹院、養玉院 他箇所の記載より、本所居住の女性と推測されるが詳細不詳。
- 54 村雲様 村雲御所瑞龍寺門跡九世日尊尼。伏見宮家出身で誓円上人の叔母にあたる。瑞龍寺は所在地周辺の堀川一条北西一体が村雲と呼ばれていたためこの名がある（近代に近江八幡市に移転）。
- 55 御本堂 これが信濃善光寺本堂の修復に関わる記載であるか否かの検証は今後の課題だが、念のため抽出した。
- 56 岳蓮社 増上寺子院
- 57 御寄進 これが信濃善光寺修復の合力寄進であるか否かの検証は今後の課題だが、念のため抽出した。あわせて本日記に「御寄進」の記載はこの時期に特徴的に出現するので、それらの項目をこの後の部分で抄出した。
- 58 麴町藤山 麴町所在のいずれかの家の奥女中と思われるが未詳
- 59 内藤充真院様 日向延岡藩第六代藩主内藤政順の正室。内藤政順は一八三四年没。
- 60 御本尊様御移し これが信濃善光寺にて修復された本堂に本尊を移した記事であるか否かの検証は今後の課題だが、念のため抽出した。以下の記載もこれに関連したものである。
- 〔謝辞〕「江戸青山善光寺奥御用所日記」の地震記事を翻刻することを、ご許可いただいた善光寺大本願・鷹司誓玉氏・鷹司誓榮氏に感謝申し上げます。また、同史料の検討の機会を整えていただいた新潟大学災害・復興科学研究所福岡浩所長に感謝致します。